

# 「任那」の滅亡と「任那の調」

高 寛 敏

## はじめに

『日本書紀』（以下『書紀』）には、「任那」の滅亡に倭軍が関与して、新羅と闘ったとする記事があり、その後も「任那の調」をめぐる比較的豊富な新羅・倭関係記事がある。それは6世紀後半から7世紀中葉にまで及ぶが、他にこれ程まとまった新羅・倭関係史料はなく、それだけに貴重な史料となっている。ところが、この一群の記事には矛盾が多く、明らかに原史料の改変や造作と思われるものが少なくない。したがって、それらの記事の原史料はどのようなものであり、改変や造作はなんのために、どのように行なわれたかを追求することは、史実の究明に不可欠のことである。もちろん先行業績も少なくないが、必ずしも鉄案が下されているとは思われないので、以下にその点について検討し、あわせてこの間の新羅・倭関係について論ずることとする。

## 1. 「任那」の滅亡

欽明紀23年（562）春正月条に、「新羅打滅任那官家」の記事があり、それは新羅が加羅（高霊）を統合した事件を示すものとして知られて

いる。ところがその分注には、「一本云、廿一年、任那滅焉」とあって、同事件を欽明21年（560）とする「一本」があったことを伝えている。この「一本」所伝は加羅滅亡年としては正しくないが、『書紀』は他の加耶諸国をも任那と称しているから、これは加羅以外の国の滅亡年を伝えたものではないかとの疑念が湧いてくる。

そもそも任那の原義は任那加羅であって、それを任那加羅以外の国名として、あるいは加耶諸国の総称として用いたのは『書紀』だけである<sup>(1)</sup>。もっと具体的にいえば、「百濟本記」の「安羅日本府」を「任那日本府」といい変えた『書紀』編纂の第二段階、即ち稿本の執筆以後で、それは8世紀のことである<sup>(2)</sup>。稿本は「百濟本記」の干支表記を天皇紀年に直して編年体としたと考えられるので、欽明紀年と「任那」の語を用いた「一本」とは、この稿本に他ならない。稿本はなんらかの原史料に基づいて執筆されたが、その原史料には「任那」ではなく、他の国名が示されていたのである。稿本は「安羅日本府」を「任那日本府」と書き変えているから、稿本の「任那」は「安羅」であった可能性が強い。

552年6月、倭国は百濟の求めに応じて「数一千・馬一百匹・船四十隻」を安羅に派遣し、百濟・安羅とともに新羅と闘った<sup>(3)</sup>が、その

(1) 田中俊明『大加耶連盟の興亡と「任那」』吉川弘文館、1993年、31～40ページ

(2) 拙稿『「日本書紀」所引〈百濟本記〉に関する研究』（在日本朝鮮社会科学研究者協会歴史部会編『高句麗・渤海と古代日本』雄山閣、1993年）

(3) 欽明紀15年（554）条に関連記事があるが、それは

実は552年のことである（注（2）、拙稿参照）。

撤収に関しては明文がない。時あたかも553年の新羅による漢城占領、554年管山城戦闘での百濟聖王敗死と続く百濟劣勢のなかで、安羅の倭軍が全て撤収しえたかどうかは、おおいに疑問のあるところである。その後間もなく起った新羅による安羅統合事件には、一定の倭軍が関与した可能性が強い。

「任那」滅亡事に倭国が関与した記事は欽明紀23年秋7月是月条にある。それによると、「任那」滅亡後に大將軍紀男麻呂宿祢と副將軍河辺臣瓊岳が派遣されたが、瓊岳や調吉士伊企儼が捕えられ、伊企儼は壮烈な最後を遂げたところである。この記事は説話的潤色が豊かであるが、伊企儼が新羅軍によって殺されたことは、なにか原史料があり、そしてそれは基本的に事実と認められよう。

本文記事の配列からすると、伊企儼は加羅で死んだことになるが、しかし内陸部の加羅は、倭国にとって直接の利害関係はなく、現実的にも出兵は困難である。そもそも552年の倭の安羅出兵の最大の目的は、百濟とともに任那加羅復建を図るためであった。任那加羅の滅亡は、朝鮮諸国からの倭国の分断・孤立を招き、それは倭国の存亡にも関わったからである。その点、内陸部の加羅は任那復建とも直接の関わりがないのである。伊企儼事件は、加羅ではなく、安羅でのことであつたと思えるのが自然なのであつて、それは稿本では欽明21年とされていたと考えられるが、その点についてはさらに後述することにして、ここではまず伊企儼事件記事の原史料について説明しておく。

その記事である欽明紀23年秋7月是月条は、冒頭に「遣大將軍紀男麻呂宿祢、將兵出哆唎。副將河辺臣瓊岳、出居曾山」とあるが、紀男麻

呂が出たとする哆唎は、繼體紀6年冬12月条に「任那国上哆唎・下哆唎・娑陀・牟婁、四県」とあつて、「任那国四県」の名としてみえる。この繼體紀の「任那四県割讓」記事は『書紀』の造作文なのであるが、ただその4地名は全羅南道一帯の地名といわれており<sup>(4)</sup>、なにかの史料から採用したと考えられる。同様に、神功紀49年春3月条の『書紀』造作文中にみえる、比利・辟中（金堤）・布弥支・半古の4邑や辟支山（金堤）・古沙山（古阜）も全羅南北道一帯の地名である<sup>(5)</sup>が、これにもなんらかの地名史料を利用したものなのである。そこで考えられるのは、白村江戦闘で敗北した百濟遺民が州柔城から牟弓を経て、弓礼で乗船して倭に向かった（天智紀2年9月条）ことであるが、その経路は州柔城から現在の金堤・古阜付近を通過して、全羅南北道を縦断した<sup>(6)</sup>らしいことである。この白村江当時の史料はいく種類かあったようで、例えば『兩唐書』の周留城は、『書紀』では州柔城とあり、それ以外にも都々岐留山（齊明紀6年9月条分注）・疏留城（天智紀元年3月是月条）と表記され、さらに神功紀49年春3月条分注の州流須祇を加えると、その表記は4種になる。そうすると周留城に関しては、4種以上の原史料が存在したことになるのである。即ち、神功紀49年条や繼體紀6年条は、白村江当時の史料に出る地名を利用したことが想定されるのであるが、当面の紀男麻呂の哆唎もその類に属するのである。

そもそも紀男麻呂は、25年後の崇峻即位前紀（587）に物部守屋討滅軍の一將として登場するので、ここに登場すること自体が疑わしい。その活動にも具体的な記事がなく、男麻呂が発した軍令というのも『三国志』孫權伝に全面的に

(4) 岩波日本古典文学大系『日本書紀』下、1965年、26ページ注

(5) 岩波日本古典文学大系『日本書紀』上、1967年、620ページ補注

(6) 全英米『周留城・白江位置比定に関する新研究』韓國文化財保護協會金羅北道支部、1976年。全氏は牟弓を全南道羅州郡南平面、弓礼城を宝城郡島城面に比定した。

依拠したものである。紀男麻呂のことは「紀男麻呂宿祢、取勝旋師」などと倭軍も一度は勝利したかのように、中国史書を参考にして造文した本文完成者（付注者）の付会と考えられるのである。

紀男麻呂に比べ、河辺臣瓊岳以下の人物は説話的ではあるが、具体的な記事があり、基本的に原史料によったものとしてよい。瓊岳は、新羅軍が降服しようとして白旗を掲げたのをみて、愚かにも自身も白旗を掲げて進んだため捕らえられる。そして命惜しさに随婦の甘美媛を新羅闘将に差し出したばかりか、後に甘美媛を訪れて拒絶されるという醜態を演じている。また倭国造手彦は命からがら逃走したとあり、薦集部首登弭は妻家に宿ったときに印書を路に落し、そのために軍計が新羅に知られたとある。要するに、これらの人物はみな卑怯で愚かな笑い者にしたてあげられているのである。

それに比べ、調吉士伊企儼だけは捕えられても屈せず、「新羅の王、わが尻をくらえ」と叫んだために斬殺された。ともに捕えられた妻の大葉子は、「からくにの 城の上に立ちて大葉子は 領布振らすも やまとへ向きて」と歌ったとある。

要するに、これら一連の所伝は、伊企儼の英雄忠節ぶりを他の人物の卑怯さに対比しながら称えたもので、調吉士氏によって説話化されたものであることがわかる。甘美媛や大葉子も現地にいたとは考えられないのであるが、その証拠に大葉子の歌はどうみても大葉子以外の人物の倭国での作になっている。甘美媛についてはわざわざ「坂本臣女」などと説明していることからすると、安康紀元年春2月条に、「坂本臣祖根使主」の奸計によって大草香皇子と難波吉師日香蚊父子が殺された、とあるのに関係するのであろう。即ち、坂本臣氏は吉士集団の共通

の敵のように認識されていて、それが説話化のなかで甘美媛の登場ということになったと推測されるのである。

伊企儼、大葉子物語は新羅の堤上夫妻を連想させる。『三国史記』朴堤上傳によれば、堤上は倭に抑留された末斯欣を救出するため、418年に倭国に向ったが、その妻が栗浦口にまで奔り至り、「望舟大哭」して「好帰来」と叫んだとある。『三国遺事』金堤上傳では、堤上は拷問にも屈せず、「鷄林之臣」であると叫び続けて死に、一方、その妻は鵝述嶺に登って倭国を望んで痛哭して終ったとある。堤上の話は、吉士集団によって6～7世紀に吉士集団を通じて倭国に伝えられていた<sup>(7)</sup>が、伊企儼・大葉子の姿は堤上夫妻をモデルとしたものと考えられるのである。

伊企儼事件記事の原史料は調吉士氏所伝で、そのうち紀男麻呂のことは『書紀』の造作文であることは確実と思われるが、そうすると「副将河辺臣瓊岳、出居曾山」の記事により、瓊岳らの倭軍は居曾山に布陣したことがわかる。また薦集部首登弭を百済に遣わしたとか、紀男麻呂が百済の宮に入ったなどとあることからすると、原史料では百済軍の参戦についても触れていたに違いない。

ここで問題は、原史料には瓊岳らの居曾山布陣の前に、新羅の動向や、あるいは新羅の布陣について触れた文言があったに違いないということである。そしてそれは、まさしく欽明22年条に「新羅築城阿羅波斯山」とある文にみられるのである。

欽明21年・22年条は新羅の貢調使、弥至已知奈末・久礼叱及伐干・奴氏大舎が相ついで遣わされて来たとあり、特に奴氏大舎が帰途に穴門に至ったとき、工匠馬飼首押勝が穴門館を「遣問西方無礼使者停宿処也」といったので、新羅

(7) 拙稿「新羅の堤上奈麻と奈勿三王子」(未刊)

が阿羅波斯山に築城して日本に備えたとある。欽明21・22年当時は、新羅と倭は敵対関係にあり、新羅が調賦を貢献するなどという事態はなく、それは『書紀』の造作になるものであるが、しかしそこに出る人名や阿羅波斯山には、なにかの原史料があったといわなければならない。それはやはり調吉士氏所伝であろう。

その根拠は二つあるが、まず第一は、新羅の阿羅波斯山築城の契機となったのは河内馬飼首押勝の失言にあるとする点である。継体紀23年夏4月是月条の新羅による任那4村抄掠記事は、近江臣氏による所伝を基本としながらも、その契機をつくった河内馬飼首御狩記事は調吉士氏所伝によったものである<sup>(8)</sup>。即ち、調吉士氏所伝は、新羅との戦闘の直接の契機をつくったのは、いつも河内馬飼首氏などとしていたのである。

第二に阿羅波斯山は阿羅（安羅）の波斯山（咸安郡末山里か）に間違いなく、それは瓊岳の居曾山布陣へと連続するからである。つまり、伊企儼事件の舞台は阿羅であったのである。そうすると三人の貢調使とされた新羅人は、原史料では貢調使ではなく、阿羅における新羅の談判使、軍事交渉者であったということになる。伊企儼はそのカバネが示すごとく、本来は武人ではなく、対外使節であった。そのため、これら新羅使人の名を比較的詳しくメモし、それを周辺に伝えたのであろう。

結局、欽明紀21年～23年条の「任那」滅亡関係記事の原史料と、その本文の完成過程は次のようになる。

原史料は調吉士氏所伝で、それは干支によって年次（庚辰年）を表記し、場所を阿羅としていた。その内容は、新羅の談判使が三人相ついで百済・倭（それに阿羅）軍を訪れたが、河内

馬飼首押勝の失言により交渉は破綻し、新羅軍は波斯山に、百済・倭軍は居曾山に布陣した。しかし百済・倭軍は、河辺臣瓊岳・薦集部首登弭の失態や倭国造手彦の敗走により惨敗を喫し、瓊岳や調吉士伊企儼は捕えられた。瓊岳は降服したが、伊企儼は最後まで屈せず殺された、ということである。

稿本は、原史料の干支に基づいてそれを欽明21年とし、阿羅を任那と書き変え、「任那滅焉」という題目の下に、ほぼ原史料をそのまま採録した。

本文完成者は、新たに加羅滅亡年の史料をえて、それを欽明23年とし、稿本の戦闘記事を分離して23年に配するかたわら、その戦闘前の記事を21年・22年条に分けて配置した。その際、前後のつじつまが合わなくなった21年・22年条を、新羅貢調使記事に改変し、舞台を倭国に変えた。そして倭軍の失態だけを伝える23年条には、紀男麻呂宿祢記事を付会して、倭軍の威容を整えようとしたのである。

調吉士氏所伝によれば、阿羅滅亡は560年のことなのである。

## 2. 「任那の調」の実体

『書紀』によれば、「任那」滅亡後も任那が存在し、新羅と闘ったり、倭国に使人を派遣して貢調している（「任那の調」）。これは額面どおりには認められないので、これら一連の記事については種々の解釈が加えられている。「任那」が既に滅亡していることは確かなので、それを前提にすると、これら諸説は二つに大別される。一つは、「任那の調」は任那が納めたのではなく、新羅が納めたのであるとして、その実体をどういう意味であれ認める説であり<sup>(9)</sup>、

(8) 拙稿『『日本書紀』継体紀・近江毛野臣朝鮮派遣記事の検討』（『大阪経済法科大学アジア研究所年報』第4号、1993年）

(9) 末松保和『任那興亡史』吉川弘文館、1949年、189～213ページ。鈴木英夫「〈任那の調〉の起源と性格」（『国史学』119、1983年）、山尾幸久『古代の日朝関係』

もう一つは、『書紀』の造作、あるいは表現に過ぎないとして、「任那の調」の実体を否定する説である<sup>(10)</sup>。前者の場合は、敏達紀4年条に基づいて、「任那の調」の起源を575年として例外がないが、実はこのことが全般の解釈を左右するので、次に関連記事を掲げて再検討してみたい。

〔1〕（敏達4年—575）六月、新羅遣使進調。

多益常例。并進多々羅・須奈羅・和陀・発鬼、四邑之調。

〔2〕（推古8年—600）春二月、新羅与任那相攻。天皇欲救任那。

是歳、命境部臣為大將軍。以穗積臣為副將軍。（分注。並闕名）。則將万余衆、為任那擊新羅。於是、直指新羅、以泛海往之。乃到于新羅、攻五城而拔。於是、新羅王、惶之舉白旗、到于將軍之麾下而立。割多々羅・素奈羅・弗知鬼・委陀・南迦羅・阿羅々六城、以請服。時將軍共議曰、新羅知罪服之。強擊不可。則奏上。爰天皇更遣難波吉士師神於新羅。復遣難波吉士木蓮子於任那。並檢校事狀。爰新羅・任那、二国遣使貢調。仍奏表之曰、天上有神。地有天皇。除是二神、何亦有畏乎。自今以後、不有相攻。且不乾船柁。每歲必朝。則遣使以召還將軍。將軍等至自新羅。即新羅亦侵任那。

〔1〕は、新羅が多々羅など四邑の調を倭に進めたという記事、〔2〕は新羅と任那が攻めあったので、天皇が軍勢を派遣して五城を抜い

たこと、新羅王は降服して多々羅などの六城を割讓したこと、そして新羅・任那二国は遣使・貢調のうえ、奏表して「不乾船柁、毎歲必朝」などと誓ったが、天皇が軍隊を召還すると、新羅はまた任那を侵したとする。

末松保和氏は<sup>(11)</sup>、〔1〕の四邑と〔2〕の六城（南迦羅はその上の四城の総称として、実際は五城とする）は、〔2〕の阿羅々（阿羅とする）を除いて基本的に一致し、それはさらに継体紀23年夏4月是月条の、新羅抄掠の四村名ともほぼ一致するので、〔1〕の「四邑の調」とは「任那の調」に他ならず、それは「任那併合後、新羅の義務として原則的に約せられたか、或は575年に至って約束されたかに起原を置く」と考へられ、その約はとかく怠られ勝ちであったので、600年に至って、積極的要求、即ち穂積臣らの出征となり、その結果、かの約は再確認された」とし、実質的には〔1〕を以て「任那の調」の起源としたのである。

鈴木英夫氏は<sup>(12)</sup>、四邑・六城の解釈については末松説を継承しながら、「神功皇后物語」に類似した〔2〕の、倭軍の新羅出兵や六城割讓は、『書紀』の造作であるが、それは新羅が対倭外交の一環として、「任那」使を派遣して、「任那の調」を納入した事実の起源譚であり、そして「任那」とは旧金官国王家を指すと説いた。鈴木説は、倭の「任那」支配を前提とする末松説を克服しようとする立場にあり、一般の支持をえているが、史料解釈には問題が残されている。

ㄴ 塙書房、1989年、328～349ページ。西本昌弘「倭王権と任那の調」（『ヒストリア』129、1990年）。末松説は倭国の「任那」支配を前提とするが、他はそれを否定し、それは新羅が対外的に不利な情勢のなかで、倭の軍事干渉を避けるための一環として納められたとする。対外的に不利な情勢としては、鈴木・山尾説は主に百済の攻勢、西本説は高句麗の攻勢を重視する。なお、「任那の調」に関する最も本格的な論考は鈴木論文であるから、本稿は鈴木説にたいする検討を主要目的とする。

(10) 金鉉球『大和政権の対外関係研究』吉川弘文館、1985年、241～257ページ。延敏洙「日本書紀の〈任那の調〉関係記事の検討」（『九州史学』105、1992年）。このうち詳細なのは延論文である。延氏は『書紀』編者の単なる造作とは考えず、推古期の国家意識の高揚とか、近江臣氏家伝自体の誇張・潤色とかを問題にするが、史料批判に難点があり、一般的に従いがたい。

(11) 末松保和、前掲書

(12) 鈴木英夫、前掲論文



まず〔1〕については、「任那」の語がないから、それが「任那の調」かどうかは、もっと慎重な検討が必要であろう。それに朝鮮諸国を貢調国とするのは『書紀』の一貫した立場であるから、新羅進調などもただの作文である可能性がある。しかし四邑名については、それは継体紀のものとは部分的に表記が異なるので<sup>(13)</sup>、独自の史料であることは確かである。〔1〕の示すところは、この四邑をめぐる当時、新羅・倭間になんらかの問題が提起されたということとどまるであろう。

〔2〕は、新羅・任那二国がそろって倭に遣使朝貢すべき由来を説き、かつ末尾の「新羅亦侵任那」によって、推古10年の征新羅軍派遣の理由づけとした造作文であるが、その文脈自体は慎重に検討する必要がある。即ち、「新羅与任那相攻」、「為任那撃新羅」とあって、新羅が六城を割譲したとなるから、六城は明らかに新羅領であって、任那領ではない。『書紀』のいう「任那の調」とは六城に係するのではなく、反対にそれを排除しているのである。したがって、〔1〕も「任那の調」記事などではありえないのである。

〔2〕は基本的に造作文であるが、その六城名の表記は、〔1〕とも継体紀のものとも少し異なる。それからすると、〔2〕にはやはりこの六城をめぐる、新羅・倭間の事件を伝える原史料があったといえる。そして原史料には、この六城をめぐる問題と関連して難波吉士神が新羅に派遣されたとあったと思われるが、任那に派遣されたという難波吉士木蓮子は『書紀』の付会であろう。なぜなら、この二人が当時の史料にともに出ていたなら、「吉師」と「吉士」の表記が異なることが理解できない。難波吉士木蓮子は敏達13年に新羅に派遣されているが、

〔2〕の木蓮子はそこから名をとって付会したものと考えられる。要するに、『書紀』はこのような原史料を利用して新羅・任那貢調起源譚を造作したことがわかるのである。

〔2〕の任那については別史料が存在する。

〔3〕（孝徳大化6年秋7月丙子—645）高麗・百済・新羅、並遣使進調。百済調使、兼領任那使、進任那調。唯百済大使佐平縁福、遇病留津館。（中略）。又詔於百済使曰、明神御宇日本天皇詔旨、始我遠皇祖之世、以百済国、為内官家、譬如三絞之綱。中間以任那国、属賜百済。後遣三輪栗隈君東人、觀察任那国堺。（中略）。又勅、可送遣鬼部達率意斯妻子等。

〔3〕によれば、645年に至って百済調使が任那使を兼領して「任那の訥」を進めたとある。その理由は、詔にいう「中間以任那国、属賜百済国」にある。この詔はもちろん事実そのものではないが、それは642年に、百済が新羅の大耶城をはじめとする40余城を奪取した事件を下敷きにした記事である。この奪取事件に関する原史料があったので、『書紀』はそれを改変して、天皇が百済に「任那国」を「属賜」したと表記したのである。後述のように、その原史料とは大化元年の史料ではなく、皇極3年（643）に来倭した豊章の伝えた情報であろうと考えられるが、『書紀』は故あって（後述）、それを大化元年の百済大使佐平縁福や鬼部達率意斯妻子史料に結びつけたのである。

642年に百済が奪取した地域はいちいち正確に示さないが、『三国史記』善徳王紀13年（644）秋9月条に、金庾信の率いる新羅軍が百済の加兮城（高靈郡牛谷面）・省熱城（宜寧郡富林面）・同火城（龜尾市）などの7城を伐ち、大勝利をえたとあるので、これらの城が最前線で<sup>(15)</sup>、

(13) 継体紀23年夏4月是月条の「抄掠四村」分注に「金官・背伐・安多・委陀、是為四村。一本云。多々羅・須奈羅・和多・費智為四村也」とある。

(14) 末松保和、前掲書

(15) 田中俊明『大加耶連盟の興亡と「任那」』吉川弘文館、1993年、62～64ページ

百済の新領土はおおよそ洛東江西岸、南江以北一帯に及んだと考えられる。即ち、〔3〕の任那とは、任那加羅以外の地を指しているのである。同様な例は欽明紀23年春正月条分注にもある。

〔4〕 総言任那、別言加羅国・安羅国・斯二岐国・多羅国・牟麻国・古嵯国・子他国・散半下国・乞漁国・稔礼国、合十国。

ここでいう任那とは、本来の任那加羅（南加羅・卓淳・喙己吞の総称）を排除した加耶諸国である。このような「任那」の用法は『書紀』編者が用いたものに過ぎず、原史料のものではない。つまり、この分注の意味は、これ以後の「任那」とは、任那加羅を排した加耶諸国を指すということを宣言しているのであって、実際それはそのまま実行されているのである。このような「任那」が架空のものである以上、敏達紀以後の「任那」記事は全くの造作か、あるいは原史料の変改であることが明らかといえよう。

それでは『書紀』は、欽明23年に任那が滅んだとしながら、なぜまた任那を登場させたのかであるが、それには二つの理由が考えられる。

一つは〔3〕に関連するであろう。『書紀』は、百済王が統治するその領土は天皇が賜与したものであるという立場で一貫しており、随所にそのような記事を造作している。〔3〕の場合も同様であって、百済が新羅から奪取した「任那」も、やはり天皇が属賜したと説き、その賜与の代価として「任那の調」を貢上させたとしたのである。そして天皇が「属賜」するためには、「任那」はまだ天皇の庇護の下に存在し、「任那の調」を天皇に貢上していたと説く必要があったのである。

「任那の調」記事造作が〔3〕を一つの出发点としていることは、〔4〕の国名表記からも

うかがわれる。その国名は、「百済本記」を参考にしたことは間違いがないが、「百済本記」には確認されない乞漁国・稔礼国の名も挙げられている。また古嵯国・散半下国は「百済本記」では久嵯・散半奚となっていて表記も異なる。〔4〕は〔3〕の原史料に出る地名をも参考にした可能性が強く、〔4〕の「任那」は最初から〔3〕の記事を念頭にして摘記されたもののように考えられるのである。

また〔3〕が出发点となったことについては、『書紀』が〔3〕の前の推古31年是歳条に、やはり「神功皇后物語」のパターンを用いて事実上、新羅による「任那の調」貢進を中止する記事を造作したことによっても推測される（詳しくは後述）。そして舒明10年是歳条の「百済・新羅・任那、並朝貢」という抽象的な記事を配した後、大化2年の貢質記事へとつないでいったのである。

『書紀』が滅んだはずの任那を登場させたもう一つの理由は、百済・新羅による「貢質」の理由づけとしてであろう。それを端的に表現しているのが次の史料である。

〔5〕（大化2年-646）九月、遣小德高向博士黒麻呂於新羅、而使貢質。遂罷任那之調。  
（分注。黒麻呂、更名玄理）。

〔6〕（大化3年是歳-647）新羅遣上臣大阿湌金春秋等、送博士小德高向黒麻呂・小山中中臣連押熊、来献孔雀一隻・鸚鵡一隻。仍以春秋為質。春秋美姿顔善談笑。

〔5〕・〔6〕によれば、新羅による「任那の調」貢進を停止するかわりに、金春秋が人質として来倭したことになる。しかし金春秋（後の太宗武烈王）は、当時の多難な新羅外交を主導した人物であって、そのような人物が倭に入質するような理由も存在せず、また1年足らずの滞在期間では入質の意味もなかった<sup>(16)</sup>。高

(16) 三池賢一「『日本書紀』“金春秋の来朝”記事について」（上田正昭・井上秀雄編『古代の日本と朝鮮』

学生社、1974年）

向黒麻呂は、乙巳の変によって成立した改新政権が新たに新羅との関係を樹立するとともに、632年以来途絶していた唐との関係を復活するために、新羅にその仲介を依頼するために派遣されたのである<sup>(17)</sup>。そして金春秋は倭国の対唐上表文を携帯して帰国、その翌年に入唐したことから考えると、金春秋の来倭の目的は、対唐上表文の伝達問題を含めて新羅・倭間に関係する政治・外交上の懸案問題など、当時緊迫していた国際情勢全般について協議することにあったと思われる<sup>(18)</sup>。大化5年と斉明元年に入質したと記された沙湊金多遂・及湊弥武もそのような流れのなかで来倭した新羅使節に他ならない。

要するに、新羅最大の人物政治家、金春秋の来倭を『書紀』は「入質」と歪曲したのであるが、「任那の調」はその理由づけとして用いられているのである。

百済の場合は少し異なる。この頃来倭した最大の人物は義慈王子の豊章である。豊章は百済君（孝徳紀白雉元年2月条）として厚遇されて長く倭国に滞在したが、百済滅亡後の661年に帰還し<sup>(19)</sup>、百済遺民によって百済王に推戴された。豊章については、

〔7〕（舒明3年3月—631）百済王義慈入王子  
豊章為質。

とあって631年に入質したとある。百済の入質については、皇極紀元年（642）秋8月条に「百済質達率長福」、2年秋7月条に「質達率武子」の名もみえる。これらによると、百済の場

合は、倭国に人質を派遣していたが、〔3〕の大化元年を契機に、（おそらくは人質のかわりに）「任那の調」を貢進したということになる。つまり、百済と新羅は、倭国に人質か「任那の調」を貢進するかという筋立てになっているのである。その最大の眼目は金春秋と豊章を「質」とすることにあったことはもちろんである<sup>(20)</sup>が、「任那の調」の造作はこれに関連すると考えられるのである。

なお、百済の義慈王の即位年は641年であるから、〔7〕の年次は正しくなく、それは643年（皇極2年）のことと考えられる<sup>(21)</sup>。豊章が643年来倭したとするなら、百済による40余城奪取の情報を伝えたのは、やはり豊章であろう。ところが『書紀』は、その情報史料に基づいて「任那属賜」記事を作ったのであるから、豊章の「質」と「属賜」が重複することになり、構想上の矛盾が生じた。また百済の最初の「質」は、新羅の金春秋の場合と同じく、一番大物の豊章でなければならなかった。このような構想上の問題点を解決する方法は、〔7〕の年次を繰り上げることである。〔7〕は意識的に繰り上げられたとみてよい。一方、〔7〕の繰り上げによって、「属賜」記事の〔3〕は「属賜」の対象を失った。そこで『書紀』は、皇極2年以後の、大化元年の佐平縁福史料に「属賜」をかけたのであろう。〔3〕の「属賜」は〔7〕とは反対に繰り下げられているのである。

(17) 鈴木英夫「七世紀中葉における新羅の対倭外交」  
（『国学院雑誌』883、1980年）

(18) 延敏洙、前掲論文

(19) 鄭孝雲「天智朝と〈百済の役〉」（『韓』116、1990年）

(20) 豊章については、『三国史記』義慈王後紀に「迎古王子扶余豊嘗質於倭国者、立之為王」とあり、豊章が倭国に入質していたとある。しかし『三国史記』編纂当時、百済遺民の反唐闘争に関する百済史料は皆無であった。編者は『旧唐書』・『新唐書』・『資治通鑑』に依拠してその記事をつくったのであるが、それらの中

国史書は鬼室福信らが倭国から故王子扶余豊を迎え入れて擁立したとするだけで、豊が「質」であったとはしていない。『三国史記』文武王3年5月条にも「迎故王子扶余豊立之」とあるだけであるから、「質」のことは新羅史料にもなかったのである。とすると義慈王後紀の「質」は、『三国史記』編者の手になるもので、史料的根拠がない。この点については、いずれ改めて再論したいと思う。

(21) 西本昌弘「豊璋と翹岐」（『ヒストリア』107、1985年）



### 3. 「任那」滅亡後の新羅・倭関係

「任那の調」に関する私見に基づき、以下に「任那」滅亡後から7世紀中葉に至る新羅・倭関係を概観しておきたい。既述のように、「任那」に関する記事は基本的に造作であり、『書紀』の編纂態度からするかぎり、「朝貢」「貢調」などの表現もそれから一旦離れて、実際の事実関係を追求する必要がある。また簡単に抽象的な遣使・朝貢記事などもあまり考慮することもないだろうと考えられる。

この時期の新羅・倭関係は推古10年までの前半と、推古18年以後の後半に大別され、前半は対立関係、後半は友好関係が基本となっている。まず前半の関係から述べる。

新羅・倭関係は欽明紀32年(571)春3月条、「遣坂田耳子郎君、使於新羅、問任那滅由」で明らかなように、倭からの働きかけから始まっている。「問任那滅由」は付会であるから、その遣使の理由は不明である。同年秋八月に新羅から欽明死去に伴う弔使未叱子失消が倭に派遣された。これが弔使かどうかは保証の限りでないが、ともかく571年に使者の交換があり、外交交渉が始まったことがわかる。

敏達4年(575)夏4月、吉士金子が新羅に、吉士詔語彦が百済に派遣された。この時任那に吉士木蓮子が派遣されたとあるのは付会で、木蓮子の名は敏達紀13年条の史料からとったものである。そしてこれに続くのが同年6月の〔1〕である。〔1〕には多々羅など四邑名があるので、この四邑をめぐる新羅・倭間の使節往来があったことがわかる。

次いで敏達8年(579)、新羅が枳叱政奈末を派遣して倭に仏像を贈った。敏達11年(582)、新羅から安刀奈末・失消奈末が倭に派遣(敏達9年夏6月条に重出記事があるが、一応11年記事をとる)され、13年(584)には倭から難波

吉士木蓮子が、推古5年(597)には難波吉士磐金が新羅に派遣された。その間、崇峻4年(591)に紀男麻呂宿祢らの征新羅軍を筑紫に派遣したとあるが、その將軍名は全て崇峻即位前紀の、物部守屋討滅軍にみえていて、造作の可能性が強い。

続いて推古8年(600)の〔2〕であるが、これによると倭から難波吉師神が新羅に派遣されたが、ここで問題になっているのはやはり多々羅などの六城(実際は南迦羅を除く五城。阿羅々は必ずしも阿羅とはいえない。)のことであった。翌年の推古9年(601)に倭は大使連嚙を高麗に、坂本臣糠手を百済に派遣しているが、それはやはり対新羅問題と関係するのであろう。そして推古10年(602)、来目皇子を將軍とする征新羅軍がまた筑紫に派遣された。これを要するに、571年から始まった倭の対新羅外交は四邑(六城)をめぐるもので、それは軍事的緊張にまで高まったということであろう。

ではこの四邑(六城)をめぐる問題はなんであったのかであるが、それはやはり海岸地帯の旧任那加羅に関することであろう。それが「任那の調」問題でないことは既に明らかであるから、やはりこの地域との交易・交通をめぐるものとししか考えられない。任那加羅は倭にとって、朝鮮と中国との交通・交易の窓口であった。そればかりか、任那加羅が滅亡すると、高句麗や新羅の勢力が海を渡って倭国に及ぶ可能性さえあった。そのため倭は任那加羅の運命に重大な関心を寄せ、任那加羅救援のためいく度か出兵した。任那加羅が新羅に統合された後は百済とともにその復建を企て、阿羅にも出兵した。「任那」滅亡後も百済・倭の交流は続いていたから、倭と朝鮮・中国との海路が全く絶たれたわけではないが、しかし旧任那加羅地域との交通・交易の重要さは変りなかったといってよい。

このような旧任那加羅地域との交通・交易をめぐる問題は、いくつかの曲折を経た後、推古

18年(610)頃に大きく妥協が計られたようで、以後の七世紀中葉頃までの後半期は新羅・倭間に友好関係が樹立される<sup>(22)</sup>。

推古18年秋7月に筑紫に到着し、冬10月に入京した新羅使人沙喙部奈末竹世士と「任那」使人喙部大舍首智買は、2年前の隋使一行の場合に準じて、中国的な賓礼儀式で盛大な歓迎を受けている<sup>(23)</sup>。そして翌年の推古19年にも、引き続き新羅から沙喙部奈末北叱智と「任那」から習部大舍親智周智が倭に派遣されている。この両度の使人は部名・官名・名が全て記されていて、この時の外交に対する両国の態度が以前とは異なるものであることを示唆している。ここに「任那」使人とあるが、それは新羅部名を称していることから、新羅使人であることに疑いはなく、それぞれの両名は新羅の大使と副使であったと考えられる。『書紀』は推古8年条〔2〕に新羅・任那貢調起源譚をつくり、ここに新羅・任那同時貢調の具体例としたのである。

新羅は、その後も推古24年(616)秋7月に奈末竹世士を派遣して仏像を贈り、29年(621)には奈末伊弥買を派遣している(是歳条)。後者に関する記事は、新羅の「朝貢」と「上表」を説き「凡新羅上表、蓋始起于此時歟」(是歳条)などとしているが、このような『書紀』の文言をいちいち事実化するのは無理があり、せいぜい国書を持参したという程度の理解にとどめるべきであるが、是歳条の性格からするとそ

れ自体も疑問が少なくない<sup>(24)</sup>。

610年頃を境として、「四邑」(「六城」)をめぐって新羅・倭間に妥協が成立し、新羅が倭に積極的に遣使した背景には、高句麗・百済の新羅攻撃が活発化したことがある。『三国史記』によれば、百済は武王2年(602)、威徳王24年(577)以来中断していた新羅攻撃を再開し、新羅の阿莫山城やその他の四城を攻撃している。高句麗も陽原王7年(551)以来の中断を経て、嬰陽王14年(603)に新羅の北漢山城を攻撃した。このような危機に対処して、新羅は対倭外交を積極的に進めた<sup>(25)</sup>と思われるが、それは622年に新たな高まりをみせる。

〔8〕(推古31年—623)秋七月、新羅遣大使奈末智洗爾、任那遣達率奈末智、並来朝。仍貢仏像一具及金塔并舍利。且大観頂幡一具・小幡十二条。即仏像居於葛野秦寺。以余舍利金塔観頂幡等、皆納于四天王寺。是時、大唐学問僧惠齊・惠光・及医惠日・福因等、並從智洗爾等来之。惠日等共奏聞曰、留于唐国学者、皆学以成業。応喚。且其大唐国者、法式備定之珍国也。常須達。

〔8〕については、前もって二つの点を明らかにしておく必要がある。まず推古31～33年条は、諸本の錯誤で、現存最古の岩崎本によって推古30～32年条に改めなければならない<sup>(26)</sup>。〔8〕は推古30年(622)のことである。次に「任那遣達率奈末智」とあるのは、人名を含め

(22) 延敏洙、前掲論文は、「657年に倭国が要請した入唐使節の同行を新羅側が拒絶するまでは、倭王権の対新羅政策は大体友好的な立場にあったとみられる」とするが、ほぼ認められるべき見解であろう。

(23) 田島公「外交と儀礼」(岸俊男編『日本の古代7』中央公論社、1986年)

(24) 鬼頭清明『日本古代国家の形成と東アジア』校倉書房、1978年、101ページ。なお西本昌弘前掲論文は、この「上表」開始記事は、推古8年の〔2〕に「爰新羅・任那2国、遣使貢調。仍奏表之曰」とあるのに矛盾するので、推古8年条の新羅王の「奏表」は、『書紀』

編者が潤色する以前の誤りではないかとする。私見では、「任那」関係の造作は本文完成段階のことで、推古29年の「上表」開始云々は稿本段階の潤色と考える。稿本段階と完成段階の一部の矛盾は、他の記事にも往々にしてみられる。

(25) 田村円澄「新羅送使考」『朝鮮学報』90、1979年。ただし田村氏は、この百済・高句麗の新羅攻撃を倭が主導したとするが、それには従えない。

(26) 井上光貞「推古朝外交政策の展開」『井上光貞著作集』5、岩波書店、1986年

て『書紀』の造作であって、それは新羅人名でもないということである。新羅人名なら、「奈末智洗爾」のように官位名の「奈末」が先に記されるべきであるし、それに「達率」は百済官位名である。

〔8〕で注目されるのは、まず新羅が数々の仏像や仏具を贈ってきたことである。葛野秦寺に納められた仏像とは、太秦広隆寺の宝冠弥勒像で、四天王寺に納められた舍利・金塔とは、『御手印縁起』金堂条に記された金塗六重宝塔壹基・金銅舍利塔形壹基に相当する<sup>27)</sup>。これらの優秀な仏像や仏具が広隆寺や四天王寺に安置されたということは、新羅仏教の本格的な浸透を意味するであろう。

次に、大唐学問僧の恵齊・恵光や医の恵日・福因が新羅使に従って帰国していることである。以後、舒明4年(632)、第一次遣唐使の犬上三田相と唐の送使高表仁を送ってきた新羅送使が、唐学問僧の靈雲・旻らを従えて来倭し、同11年(639)、大唐学問僧の恵隱・恵雲が新羅送使に従って帰国、同12年(640)には大唐学問僧清安・学生高向漢人玄理が新羅を伝って帰国した。このような学問僧や学生は、唐からの帰途、新羅の都慶州に滞在し、新羅の仏教や学問にも接したのであって、「この時期の大唐学問僧は、同時に新羅学問僧の一面をもっている」<sup>(28)</sup> ためである。

〔8〕とその後の一連の動きでわかることは、新羅が倭国の外交路線を新羅・唐路線に接近させようとしたこと、そのため唐学問僧や学生を

通じて親新羅人脈を形成するとともに、特に新羅仏教の浸透をはかったということであろう。そのような意味で、622年はその契機となった重要な年であったといわなければならない。

ところが〔8〕には、これと相反する記事が是歳条・冬11月条として続けて記されている。これをどう解釈するかである。是歳条は長文なので、要約すると次のとおりである。

①新羅が任那を伐ったため、天皇は群卿に新羅征討を説いた、②群卿らは任那を百済に付すべきだとする意見と、百済を批判し新羅を支持する意見とに分裂、対立した、③群卿会議としては新羅への出兵は避けて新羅・任那に遣使(吉士磐金・吉士倉下)した、④新羅・任那は調を進めることにしたが、急拠、倭政権が派兵したために両国の使者(奈末智洗遲・達率奈末遲)は戻り、改めて任那調使(堪遲大舎)だけが派遣され、調が貢上された。⑤倭軍が新羅王を降服させた。

〔8〕と是歳条は、新羅・「任那」使人の名前が一致していることからみても、同一事件のはずであるが、その内容は大きく異なり、矛盾している。〔8〕は平和的な使節の来倭を伝えているのに、是歳条は倭の大規模な軍事行動と新羅の降服を説いている。また〔8〕は智洗爾一行の来倭を伝えているのに、是歳条は途中でひき返したとある。〔8〕は基本的に史実であることが証明されるから<sup>(29)</sup>、それと矛盾する是歳条は改変されているのである<sup>(30)</sup>。

是歳条は造作文であっても、一般に②の外交

(27) 田村円澄『飛鳥・白鳳仏教史』上、吉川弘文館、1994年、176～177ページ

(28) 田村円澄、前掲(25)論文

(29) 新川登亀男『推古朝末年の仏教統制制』(『日本歴史』358、1978年)

(30) 井上光貞、前掲論文は、秋7月条の智洗爾・奈末智を是歳条では智洗遲・奈末遲としているから、両者の原史料は異なるとするが、そうとも断定できない。そもそも秋7月条の任那使人達率奈末智が『書紀』の造作と考えられるのに、是歳条にも登場するから、是歳

条も『書紀』の造作とみるべきなのである。是歳条では智洗遲・奈末遲が戻った後、改めて任那調使の堪遲大舎が派遣されたとあるが、冬11月条では調だけが貢上されたとあって矛盾する。この堪遲という人名は、いかにも記事の内容に即して考え出されたものにふさわしい。このことからすると、「任那の調」関係記事は本文完成段階で基本的に造作されたものであるが、二次的に堪遲大舎のことが加えられ、その時に他の二人名もこの悪字の「遲」に統一されたのではなかろうか。一種の悪ふざけのようなものである。

論争だけは事実であるとされる。しかしこの外交論争がなければ、使者派遣の後に軍勢を送るといった③・④の「手ちがい」はおこりえなかったから、②だけを史実化することはできない<sup>(31)</sup>。是歳条は、対新羅出兵・新羅降服など、「神功物語」をパターンとし、その発端を「新羅伐任那」としている点で、推古8年条と同巧の造作文としなければならない<sup>(32)</sup>。既に明らかなように、「任那の調」関係記事全体が基本的には造作なのである。

問題はなぜこのような造作がなされたかである。それは〔2〕の造作が新羅・任那貢調の起源を語ることにあったから、全くの同パターンの造作である是歳条もそれに関係するということであろう。結論をいえば、それは実質上の「任那の調」廃止を語るためのものであるということである。是歳条の基本趣旨は、百済や新羅の意志とは関係なく、倭政権内の「手ちがい」により、任那使は来なくなったということであろう。それが調のみが進められたとあるのは、「任那の調」と「人質」とをつなぐためのものであって、『書紀』はここで「任那使」による「任那の調」貢上の終りを事実上宣言しているのである。それは「任那使人」の具体的な記事が続ける材料も以下になかったので、ここに大化元年の「百済調使兼領任那使、進任那調」

をにらみながら、〔2〕の後始末としたのであろう。

## おわりに

『書紀』の「任那」滅亡と「任那の調」記事の「任那」は、原義の任那加羅の意でないばかりでなく、その任那加羅を排除した、それ以外の加耶諸国を指している。このような「任那」の用法は、『書紀』編纂の第二段階である稿本執筆段階以後のもので、原史料に基づくものではない。

「任那の調」関係記事は、百済による洛東江東岸一帯の占領を、天皇が百済にそれを「属賜」したとし、あわせて金春秋・豊章を「質」とするための造作であって、それはおそらく第三段階の完成段階でのことである。その造作の材料に用いられたのが、なんらかの原史料に出る地名や人名なのであるが、その原史料を復原してこそ、はじめて史実に接近できるのである。

今までの「任那の調」に関する研究は、それを「任那四邑の調」とする末松説を例外なく継承したもので、それは出発点から誤っていたといわざるをえない。「貢調」・「貢質」を中心として論ぜられてきた6・7世紀の朝日関係史は、根本的に再検討されて然るべきであろう。

(31) 西本昌弘、前掲論文

(32) 是歳条で原史料に基づく可能性があるのは吉下倉下であろう。吉士磐金は推古紀6年4月条に難波吉士磐金、皇極紀元年2月条に草壁吉士磐金とみえるので、

是歳条のものは極めて疑わしい。是歳条と冬11月条でいえることは、吉士倉下が奈末智洗爾らを送って新羅に行き、冬11月に帰国したということであろう。